

【暗証聖句】

「金持ちが貧乏な者を支配する。借りる者は貸す者の奴隷となる。」箴言 22 章 7 節

【日・負債の問題】

申命記 28 章 1, 2 節「もし、あなたがあなたの神、主の御声によく聞き従い、今日わたしが命じる戒めをことごとく忠実に守るならば、あなたの神、主は、あなたを地上のあらゆる国民にはるかにまさったものとしてくださる。あなたがあなたの神、主の御声に聞き従うならば、これらの祝福はすべてあなたに臨み、実現するであろう。」

申命記 28 章 12 節

「恵みの倉である天を開いて、季節ごとにあなたの土地に雨を降らせ、あなたの手の業すべてを祝福される。あなたはそれゆえ、多くの国民に貸すようになるが、あなたが貸してもらうことはないであろう。」

もし、私たちが主の御声によく聞き従い、その戒めを守って生活するならば、神様の大きな祝福が臨むと繰り返し約束されています。その祝福の結果、人に貸すことはあっても、借りなければ生活できないような窮地に追い込まれることはないと続きます。この約束は、イスラエルにのみ当てはまることなのでしょう。それとも、現代生きている私たち一人ひとりにも当てはまることなのでしょう。神様の言葉は真理であり、永遠に滅びることはない約束されているのですから、現代に生きる私たちにも、もちろん当てはまることです。私たちも神様の教えに従って忠実に生きる限り、主の祝福から漏れることはないのです。

聖書の時代と現代とを比べてとき、どちらのほうが生活しやすいのでしょうか。多くの場合、自由と人権が守られ、様々な社会保障も充実している現代のほうが、生活しやすい環境にあると言えるかもしれません。しかしながら、多くの人は何らかの負債を抱えて生活しています。現代は、自給自足が可能な時代ではないので、何から何までお金がかかります。住宅や高額医療、子供の教育費など、多額の失費の伴うものも少なくありません。多くの場合はローンを組んで、返済していくことになります。それが収入に見合った返済可能な範囲でのものであれば問題はないのですが、時には、収入以上の失費となってしまうたり、それにより首が回らなくなってしまったりすると大変です。

多くの負債を抱えてしまう背景には、まず無知と貪欲があります。すべては神様が与えてくださったものであることを覚え、きちんと管理していく責任と、与えられたもので満足し、神様へ感謝する気持ちが大切です。これにより不必要な負債を負うことから守られます。しかし、病気や自然災害、事故など思いがけない災難に見舞われて、多くのお金が必要となることもあるかもしれません。その場合は、その人に責任はありませんが、神様が何らかの目的をもってそれを許しておられるわけですから、必ず良い結果に導かれることを信じていくことが大切です。それと共に、日ごろから計画的に貯蓄することで、このような突然の失費に備えていることも大切でしょう。

そして申命記 28 章から、私たちは主の御声に従っていたかどうかということも考えなければなりません。聖書では大きな災難によって、「私こそ主であることを知るであろう」と語る神様の言葉が繰り返し出てきます。この原則は今も変わらないのです。

【月・神の勧告に従う】

マタイによる福音書 6 章 24 節

「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

ヨハネの手紙一 2 章 15 節

世も世にあるものも、愛してはいけません。世を愛する人がいれば、御父への愛はその人の内にありません。

富とこの世にあるものを愛してはならない。これは聖書の明確な教えです。もしこれらのものに心が奪われるならば、神様への愛はだんだんと失われていきます。すると、いつしかこの世のものが神となり、気が付けば富に仕える者になってしまうことでしょう。二人の主人に仕えることはできないということを、私たちクリスチャンは経験的に知っています。自分の心を探ってみれば、どちらのものにより一層心が惹かれているか、すぐにわかることです。両立させることはできません。この世を否定しなければならないということではありませんが、どちらに仕えるかを、私たち自身が決定しなければならないのです。私たちが神様を第一とするならば、自然とこの世の誘惑はおさまっていきます。そして、感謝しつつ、必要に応じて、管理できるようになっていきます。

詩編 50 編 14, 15 節「告白を神へのいけにえとしてささげ、いと高き神に満願の献げ物をせよ。それから、わたしを呼ぶがよい。苦難の日、わたしはお前を救おう。そのことによって、お前はわたしの栄光を輝かすであろう。」

「満願の献げ物」というのは、何か願い事をしてそれが叶えられたことへの感謝の献げ物のことです。きっといろいろあることでし

よう。その中でも、私たちは、罪赦されて永遠の命が与えられたことへの感謝をささげていくことを覚えたいと思います。

【火・負債からどのように脱出するか】

「金持ちが貧乏な者を支配する。借りる者は貸す者の奴隷となる。」箴言 22 章 7 節

この聖句は確かにその通りです。私たちは皆、自由を生活しているのだと思っているかもしれませんが、借金をしてしまうと、実は貸した人の奴隷のような関係につながってしまうのです。だから、私たちはできる限り、借金をしない生活を心がけなければならないわけです。しかし、欲しいものがあれば借金をしてでも手に入れるのは当たり前と考える人が少なくありません。特に、世界一の経済大国であるアメリカでは、そのように考える人が多く、そのことに抵抗を感じる人は少ないようです。その結果、2008 年に起きたリーマンショックに端を発した世界不況は、まだ記憶に新しいところです。サブプライム住宅ローンという中・低所得者向けの住宅ローンが、住宅価格の下落をきっかけに不良債権化し、世界中を巻き込む経済不況に発展してしまったのです。その後、アメリカ国内の多くの教会では、正しいお金の使い方を教えるようになったという話があるくらいです。この背景には、世界一の経済大国であるがゆえの富への誘惑があるのかもしれませんが、しかし、神様は私たちがローンに追われるような生活することを望んではおられません。聖書の原則に立ち返り、神様を第一とすることで、借金が当たり前という生活から抜け出すことが大切です。

【水・連帯保証人と一攫千金を狙った商法】

箴言 22 章 26 節「手を打って誓うな、負債の保証をするな」

箴言 17 章 18 節「意志の弱い者は手を打って誓い、その友のために証人となる。」

日本は、何かにつけ保証人が求められます。これは、もしも何かが起こり、契約者本人に解決能力がないときに、保証人に責任を追及するためです。私たちはこの保証人についてどのように考えるべきでしょうか。保証人になるのも愛なのでしょう。基本原則は保証人になるべきではないと聖書は教えています。保証人になってしまうのは、意思が弱いからだとも言います。したがって、強い意志をもって、保証人にはならないときっぱりと断ることが大切です。困っている人を助けるのが愛ではないかと苦しくなるかもしれませんが、これは聖書の教えに従っているのです。

以前、突然日系ブラジル人が教会にやって来たことがありました。自分もアドベンチストだと言います。しかし、一度も教会へ来たことのない人でした。最初とても愛そうがよかったのですが、やがて保証人になってほしいから教会に来たことがわかりました。とても悩みましたが、教団の指示も仰ぎ、申し訳ないけれども保証人となることはできないと断ると、それでも教会かと、とても攻撃的になって出て行ってしまったのです。もし、保証人になれば、そのとき 1 回限りのことではなく、ずっとその後も続くこととなります。聖書で禁じられている負債を抱えるリスクを持ち続けるのは、やはり主の御心ではないのです。もし、どうしても保証人にならなければならないような場合は、もしものときに保証する覚悟が必要ですし、そもそも自分に保証できるだけの力があるかを考えなければならないでしょう。

テモテへの手紙一 6 章 6、7 節「もつとも、信心は、満ち足りることを知る者には、大きな利得の道です。なぜならば、わたしたちは、何も持たずに世に生まれ、世を去るときは何も持って行くことができないからです。」

「何も持たずに世に生まれ、世を去るときは何も持って行くことができない」とは、まさにその通りです。一攫千金を狙って、万が一使いきれないほどの富を手に入れたとしても、それを天国にも地獄にも持って行くことはできないのです。与えられた物で満足するという生き方は、すべての人にとって大切な教えです。

【木・借入の長さとお金のポイント】

聖書の時代も、様々な事情で負債を抱えている人は少なくありませんでした。そこで主は、「七年目ごとに負債を免除しなさい」（申命記 15 章 1 節）と言われました。神様は常に弱い立場にある人のことを大切に考えてくださる方なのです。神様の御前には、すべての人が罪を犯したために、払いきれない借金を抱えて生きているようなものです。しかし、神様は御子の命によって、すべての借金を肩代わりしてくださったのです。7 年目ごとの借金の帳消しの制度は、弱者を助けるだけでなく、神様も私たちの借金を帳消しにしてくださったことを忘れないためでもあるのです。

ところで、聖書の時代はこのように借金は最長でも 7 年まででしたが、現代のローンは住宅ローンや教育ローンのように、長期にわたるものです。額が大きいだけに、短い期間では返済しきれないからです。理想と現実の違いと言えばそれまでですが、利息の負担を少しでも減らし、借金から少しでも早く解放されるためにも、借入金はできる限り最小限に抑え、できる限り早く完済してしまうことが大切でしょう。